

五輪塔資料の研究・日本仏典鎌倉吉野期編

斎藤彦松

一 序

本研究は鎌倉吉野期、即ち十三、四世紀の日本仏典が包蔵する、五輪塔に関する資料の整理研究である。此の国の五輪塔は九世紀には既に出現をみ、以来平安鎌倉と十三世紀に入ると次第に展開、発展する。現行する信仰遺物を見るに、鎌倉吉野期が最も日本的な美しさを保持し定形化していると思われる塔を、生み出したとも推考される、本期仏典中の五輪塔資料を集録整理して、その概要を明らかにし、更には、特徴、価値等に迄及んでみよう。

二 資料研究の位置

- 此の研究は既に本学会で連続発表して来た、一連の研究で
- 1 「五輪塔成因の研究」 S.P. No. 56 (昭和56年)
 - 2 「五輪塔資料の研究・仏教経軌編」 S.P. No. 53 (昭和77年)
 - 3 「五輪塔資料の研究・日本仏典平安期編」 S.P. No. 62

(昭和57年)

- 4 「五輪塔資料の研究・十二世紀迄の遺物編」 S.P. No. 63 (昭和58年)

ある是等にくもくもので、鎌倉吉野期は、五輪塔史上最盛期を形成するものとされている。表記すると次の如くなる。

五輪塔資料研究の整理表

現物資料	遺物		文獻資料		内容
	地域	大	陸	因	
	日本	平安期仏典	仏教経軌	成	立
		鎌倉吉野期仏典		展	開
				展	展

三 鎌倉吉野期に於ける五輪塔の名称

先ず「五輪」と「五輪塔」であるが、五輪と記しても五輪

塔を指す場合も多く、又塔を意識せざるも、各輪一括を主意する場合もある。両者を含めた意が殆んど推定されるところから、本論では両者区別せず同論するを主とした。

経軌及平安期資料に於ける名称は、それぞれの資料研究で述べたが、不空の訳語とされる「五輪塔」なる名称は、平安期から本期に入ると次第に多くの使用例をみる。是に準ずる名称として「五輪塔婆」「五輪率都婆」も定着して使用されて来る。本期に初出する名称としては、a 五輪定惠成就塔（覚禪鈔） b 五輪五色塔（白宝抄） c 法性五輪塔婆（同上） d 五大法界塔婆（薄双紙口決） e 水精五輪塔婆（白宝口抄） f 胎藏大塔婆（同上）等がある。

四 本期仏典資料にみる特殊形式

平安期から鎌倉期に入ると、集団地域も出現し、塔形の地方色なども形成されて来る。今それ等を塔の各輪にみる。

1 火輪 経軌資料以来その形は「三角」と明記されているが信仰遺物では側面三角、平面四角が定形化している。例外的に、側、平共に三角形の所謂三角火輪の五輪塔が僅ながら今日に及んでいる。³醍醐寺の成賢の著に「三角火輪形塔婆」なる語の記載をみるのは「三角火輪」初の文献である。平面四角が定形化した五輪塔時代の中で、火輪は三角形表現である事から、側、平共に三角であるべきとの考えに拠るも

のと推定される。成賢が居住した醍醐寺には既に三角五輪塔を頂いた、白銅製率都婆鈴が存在して居る事は重要である。又同寺に剃髪した東大寺再建僧「重源」の遺した数基の水精、銅製の五輪塔の何れもが三角火輪である事及、同寺円光院趾に埋納されている銅製五輪塔も又三角火輪と推定される事は注意される。

又側面三角火輪が「尖端向下」³（▽）の記載が、天台僧光宗の撰にみられる。是は平安期資料中の静然撰「行林抄」中の記載を承けたもので、台密の伝統と解される。

2 空輪 「溪風拾葉集」に「空輪非正円。或如覆鉢器」とありて、平安期資料には見出せなかったところの空輪覆鉢器説となる。此の説は遺物にも影響を与える。

五 鎌倉吉野期の五輪塔観

五大、五輪、と記しても五輪塔の意であることが多く、用法上それを合した資料からの、五輪塔観を概要記しよう。

A、伝統的五輪塔観

Suga の漢訳語としての「率都婆」「塔婆」「塔」又「制底」等の語が、そのまま五輪塔であるとするのは、密教以来の伝統又は慣習と推定され、本期資料にもその明記をみる。

①「塔者五輪塔」³ ②「制底者五輪塔」⁶ ③「塔婆色体五大法性也」⁷

次に五輪塔成因資料、経軌資料、平安期資料の主要点を概記して、それに継続する本期の五輪塔観を概要記する。

①ペンサン寶珠 梵(Brahman) = 五大⁽²⁾ (輪)⁽³⁾

②寶輪寶珠 五輪率都婆 = 大日如來⁽²⁾

③宝照寶珠 五輪塔 = 大日如來 → 普照法界・離苦有樂⁽²⁾

④離苦有樂寶珠

⑤a) → 五輪 → 大日 (發論・源興論・勝鬘經)

⑥五輪塔婆 = 大日 { 地水火風空五大 } 敬上最上善根⁽²⁾
阿彌藍叶劍五字 造之諸仏隨喜

⑦五大 { 顯五大 地水火風空 } 悉具⁽²⁾ 音響⁽²⁾
密五大 五字五仏 } 不離一切音聲

⑧a vaim rain haim khaim → 率都婆 { 方円三角半月団形 }
地水火風空五大所成

{ 法界衆生 } 大日 (口誦論)
拔苦与樂

⑨五大 { 方円三角半月団形 } 諸法能生
黃白赤黒青 a va ra ha kha } 法界極位⁽²⁾

⑩a vaim rain haim khaim → 五輪塔婆 = 大日⁽²⁾

⑪釈迦 法界体性智 { 在地 胎藏五輪 }
在天 金界五智如來⁽²⁾

以上の如く本期もその主要は、平安期の継続であるが、その

基点を梵字(種子真言)としたものが見られるのは注意される台密では法華密教の故か、釈迦に根源を求めている。

B、哲學的 五輪塔観

①地水火風空 a vaim rain haim khaim 以五字建立一世界⁽²⁾

②万物五生出 (口誦論)⁽²⁾ ③万物五大より縁起⁽²⁾

④五輪五大法界万物含藏⁽²⁾ ⑤五大万法を具表⁽²⁾

以上の哲學的 五輪塔観を整理すると、次の如くになり

五大 { 世界を建立 }
五輪塔は { 万物を出生 } 縁起 含藏
万法を具表

ペンサン寶珠特にパニシヤン Upanisad のその源流をみる (因縁寶珠經 S.P. No. 56)

C、五輪塔人身観

此の人身観は、大陸以来のものであるが、本期資料では具體的發展がみられる。

⑨内五輪へ心。外五輪へ身。五輪へ五臟、發。(口誦論)⁽²⁾

⑩法界五大与自身大無二無別。故法界即自身。⁽²⁾

⑪我等身体是五輪也⁽²⁾ ⑫一切衆生皆悉五輪即身体也⁽²⁾

⑬五体五輪也⁽²⁾ ⑭自身即五輪法界塔婆 (圖論)⁽²⁾

⑮五体則地水火風空五大成身 (口誦論)

五輪を人身五体の各部に対応せしめる思想表現は、五輪人身観で、本期に入ると明確に 人身 = 五輪 (身) と記述表

現されて来る。更に本期資料で注目すべきは「有漏、無漏人身五輪観」である。則ち次の如し。

②③梵有漏田身五大。成梵身五大五輪皆也。⁽⁸²⁾
有漏、無漏両身共に五大成身としている。

D、五輪塔に見る即身成仏思想

即身成仏。是は仏教者の理想とも解される。五輪塔に於ける「即身成仏思想」は、その基盤に、哲学的五輪塔観、五輪塔人身観、仏衆生同一思想⁽⁸³⁾、が推考される。

②④衆生即身塔發故。即身成仏。⁽⁸³⁾（白宝鈴）

②⑤即身成仏義。諸仏五大衆生五大。無二無別。⁽⁸¹⁾

②⑥田身五輪皆現心舍利。是則即身成仏之義也。⁽⁸³⁾（秘鈔問答）

②⑦真言教に五輪成仏ヲ殊ニ本體談也。⁽⁸³⁾（溪風拾葉集）

是等の思想には、五大思想發生のバラモン哲学に見るところの梵→五大に遠源をみる。此の思想は更に仏教に入り（大田＝五輪塔婆）→（五輪塔人身観）となり、是等を基底に成立した事が推考される。平安期資料の「秘藏記」に「五大所成の故に草木非情成仏」の意あり注意される。

「即身成仏」と「五輪成仏」が同義語となつて来る。

E、五輪塔観にみる仏、衆生同一思想

此の思想は、即身成仏思想と共に五輪観を基盤としている。

②⑧我仏衆生同一五大同一法界也。⁽⁸³⁾（白宝鈴）

②⑨諸仏五大。衆生五大。無二無別。⁽⁸³⁾（金界発愿抄）

五輪塔資料の研究・日本仏典鎌倉吉野期編（斎藤）

がここで注意される事は、物質の重視にある。即ち世界を形成している五大（物質）も、人を形成している五大も同一の五大であるとする。その事が仏、衆生（人間等）同一思想となり、即身成仏思想へと進展する。

此の思想はバラモン教の奥義書哲学である「梵我一如」

梵 Brahman } 一如 Buddha

我 Ātman } 衆生 Satva

の思想が、日本の鎌倉期五輪塔観に底流している。

F、五輪塔観にみる抜苦与樂と浄土思想

是等の思想は既に平安期資料にみられ、東密の空海、元果、淳祐等の著に「抜苦与樂」の記述がみられる。又台密の安然には「離苦得樂」が見える。今是を整理すると

衆生發 (五輪塔) { 方田川角半円田 大田 { 諸界衆生發
地水火風空 衆生發

となり又覺鑒は「悉皆浄土は率都婆に攝し、諸仏土即率都婆」と記している。是等平安期資料を承けた形で、本期では

③⑩率都婆。五大所成。方田川角半円田形。衆生拔苦中衆。⁽⁸⁷⁾

以上の抜苦与樂思想は、更に浄土思想へと継続する。

六 五輪塔と舍利、宝珠

舍利と率都婆は、日本仏教の初期よりの主要信仰で、密教

の渡来により宝珠も行を共にするに到った。

③五輪即舍利也。宝珠也。（薄双紙口決）⁽⁴⁸⁾

③舍利者五大源極也。舍利即宝珠。宝珠即五大也。⁽⁴¹⁾

③五字五輪宝珠同一体義可知。（白宝口抄）⁽⁴⁹⁾

「大智度論」に「舍利變成此珠」とあり、舍利と宝珠は早くより同一視されているが、本期資料では

舍利＝宝珠＝五輪五大

とし、日本密教信仰の重要点を打出して来る。

七 胎金両部表現と五輪塔

経軌資料以来、五輪塔はそのまま大日塔であるが、平安期から鎌倉期に入ると、改めて「胎金不二の大日塔」となる。

③両部法体同是五大也。（諸法分別抄）⁽⁵⁰⁾

③而部大日同以五輪為法体。是則色心不二門也。⁽⁵¹⁾

③理所成五輪世界金剛界大日所住。智所成五輪世界胎藏界大日所住（大日經教主本地加持分別）⁽⁵²⁾

③五輪塔總論金一本照密契金。（了因決）⁽⁵³⁾

以上の如く、両部大日＝五輪塔の思想が、東台の両密に見られる事は重要である。

八 南天の鉄塔と五輪塔

両部大經相承の伝承を持つ鉄塔信仰は、日本密教では重要

である。本期に入ると 南天鉄塔＝五輪塔 となる。

④菩提心体即五輪又鉄塔也。⁽⁵⁴⁾ ④鉄塔者法界塔塔也。⁽⁵⁵⁾

④昆盧、鉄塔五輪形故ニ名立輪。（了因決）⁽⁵⁶⁾

九 法華經多宝塔と五輪塔

多宝塔＝五輪塔の思想が生れ、信仰遺物も現存する。

十 双圓性海思想と五輪塔

「双円性海塔信仰の研究」に詳説せるあり。⁽⁵⁷⁾

十一 神道に於ける五輪塔

台密には、大神宮神宝に五大輪表相在之。等の資料あり。⁽⁵⁸⁾

十二 結

五輪塔観は鎌倉期に入ると、古代インドのウパニシャッド思想が蘇った如く、五大五輪塔より、万物、万法、及び世界を出生縁起し、それ等を建立、含藏すると記録している。

此の五輪塔は、古代バラモン哲学にその成因を発し、インド、中国、日本と伝流し、平安仏教に開花をみ、鎌倉吉野期に最盛期を迎え今日に継続をみる、日本国有縁の塔である。

1 Saito Print の略。

2 唐代五輪塔の研究 S. P. No. 10 印度学仏教学研究」6—2。

醍醐寺五輪塔の美術史的研究 S.P.No.34 「印度学仏教学研究」
15-1。

- 3 遍口鈔 大正七八・六九二。
- 4 溪嵐拾葉集 大正七六・五六七。
- 5 白宝口抄 大正図六・八〇六溪嵐拾葉集大正七六・六九〇。
- 6 諸法分別抄 大正七七・七一五。
- 7 大正七六・五一。
- 8 Bīḥḍaranyaka up. 424-5 「梵は五大等所成なり」。
- 9 Mairīyana up. 6-4 要旨「梵＝唵 (om) 」「空風火水地。
仏頂尊勝心破地獄儀軌 大正十八・九一三」「方円三角半月圓
形。地水火風空五大所成故。此率都婆成摩訶毘盧遮那如來」。
- 11 金剛界大法對受記 大正七五・一一六「方円三角半月形。地
水火風空所成。放光普照法界。於衆生界離苦得樂。此卒都婆婆
成毘盧遮那如來」。
- 12 覺禪鈔 大正図五・五七九。
- 13 同上五九四。
- 14 諸法分別抄 大正七七・七一九。
- 15 阿婆縛抄 大正図八・一〇一二。
- 16 溪嵐拾葉集 大正七六・五九〇。
- 17 幸心鈔 大正七八・七二〇。
- 18 大正図一〇・一二〇三。
- 19 白宝口抄 大正図六・八五二。
- 20 同上八〇七。
- 21 阿婆縛抄 大正図八・八五二。
- 22 大正図一〇・三六。
- 23 秘鈔問答 大正七九・四一三。
- 24 同上五一八。
- 25 白宝口抄 大正図七・五一五。
- 26 同上七・二七。

- 27 大正七七・七五三。
- 28 大正七七・一七七。
- 29 白宝抄 大正図一〇・三二一胎藏入理鈔 大正七九・一四九。
- 30 大正図一〇・六〇五。
- 31 金界發惠抄 大正七九・一二一。
- 32 大正七九・三〇一。
- 33 大正七六・五〇三。
- 34 大正一〇・二二三。
- 35 大正七九・一二八。
- 36 金剛界大法對受記 大正七五・一一六。
- 37 白宝抄 大正図一〇・三七六秘鈔問答 大正七九・三四四。
- 38 大正図一〇・三〇胎藏入理鈔 大正七九・一四五。
- 39 薄双紙口決 大正七九・二四六。
- 40 同上二九六。
- 41 白宝抄 大正図一〇・二〇三白宝口抄 大正図六・三七五。
- 42 同上大正七・三六八。
- 43 大正七七・七二八。
- 44 同上七三〇。
- 45 大正七七・七七六。
- 46 大正七七・一八五。
- 47 薄双紙口決 大正七九・二九六。
- 48 大正七六・八六五。
- 49 大正七七・一八四。
- 50 本誌通卷 第四七号。
- 51 溪嵐拾葉集 大正七六・七二三。

(梵字資料研究所所長)